江戸東京土木遺産

日本庭園

日本の庭園は、石を環状に並べた古代のストーンサークルや、磐座（いわくら）など、宗教色の強い装置や場が起源とされる。パラダイス、浄土を現世に再現しようとした試みは、長い時を経てその技術、造形を高度化させ、江戸時代に回遊式庭園として開花した。その集大成、江戸期発祥の日本庭園にフォーカスする。

造園技術の集大成「大名庭園」

古代の自然崇拝を背景とした環状列石などは、当時の人々が自発的に神聖なパワースポットを身近なエリアに整備しようとした、という意味で庭園の原点と言えるかもしれない。奈良、平安時代には、大陸から伝来した仏教、道教の宗教観や思想を日常的な空間に構築しようとする浄土式庭園が盛んに造成された。日本最古の造園関連の文献「作庭記」が書かれたのもこの時期である。当時の構造のまま現存するものはないが、遺構が発掘され、調査研究が進められている。

鎌倉時代に入ると武家が主導して書院造の邸宅などと調和した書院式が現れる。この様式は、室町時代に実際の水を使わずに石や砂を用いて山や水辺の風景を再現した枯山水庭園に発展。さらに、豪華絢爛な文化が花開いた安土桃山時代においては、室町時代の剛健さに加え、華麗な石組構成などを取り入れるようになった。

江戸時代の庭園はそれまでの書院式、枯山水の様式と華やかさを継承し、散策、観賞を主眼とした回遊式を確立する。多数の樹木を混植して一つのモチーフとして見せる「大刈り込み」の技法や、茶室に付随する「露地（茶庭）」の流行など、多彩な様相を見せた。このころの庭園は俗に「大名庭園」と称され、各藩の大名が権勢を誇る庭園を競い合うように造園した。そうした背景もあり、日本庭園の築造技術はこの時期に頂点を迎えることになる。そのレガシーを東京の駒込と汐留に訪ねてみよう。

江戸城御吹上総絵図（提供：東京都立中央図書館特別文庫室）
明暦の大火以降、江戸城郭内にあった武家屋敷は外に移され、庭園として造成された。

文：槌田 波留基

六義園（りくぎえん）

柳沢吉保が造営した日本庭園の真髄

六義園の中央には大泉水が設けられ、中の島が浮かぶ。島の左手が「妹山（いもやま）」、右手が「背山（せのやま）」。それぞれ女性と男性を象徴する築山でその間柄を表現している。

繊細な景観で魅せる「和歌のテーマパーク」

JR山手線・地下鉄南北線の駒込駅の南口に降り立つと、通りの反対側に新緑に囲まれた立派な門が見えた。六義園の染井門だ。桜の時期以外は閉門されているため、本郷通りを７分ほど南に下ったところにある正門から園内に入る。５m近い高さの鬱蒼とした木立を抜け、内庭大門をくぐったところで視界が開ける。目の前に海辺の眺望をそのまま再現した景観が広がっていた。

六義園は第五代将軍徳川綱吉の寵愛を受けた側用人・柳沢吉保が７年の歳月をかけ1702（元禄15）年に完成した「回遊式築山泉水」だ。吉保が和歌をモチーフとして自ら設計、造成の指揮にあたり、紀州（和歌山県）和歌浦をはじめ、各地の景勝地や和歌に詠まれた名勝を表現している。回遊式築山泉水とは、池を中心としてその周囲に園路を巡らし、小島や橋、築山を配して名勝地を再現した回遊式庭園の一般的な様式だ。六義園は偕楽園（水戸市）、兼六園（金沢市）などとともにその典型といえる。六義園という庭園名は中国の古い漢詩集にある「詩の六義」、つまり風（ふう）・賦（ふ）・比（ひ）・興（きょう）・雅（が）・頌（しょう）という分類法を、紀貫之が転用した和歌の「六体」に由来する。

庭園は、中の島を有する大泉水を中心に、これを取り囲むように幾重にも小道が延びている。散策路に沿ってほんの少し移動するだけで、その風景は繊細に表情を変えていく。ポイント、方角によって万葉集、古今集に収められた和歌にちなんだ情景が再現される。その数、88ヶ所。この「八十八境」には、それぞれに景勝地を示す石柱が建てられていた。現在も32基が残されており、随所に歌と景観の関わりを解説するパネルも設置され、さながら和歌にちなんだ物語のテーマパークの趣がある。

六義園は明治時代に入って三菱の創業者である岩崎彌太郎の別邸となり、1938（昭和13）年に東京市に寄付された。その後1953（昭和28）年、国の特別名勝に指定、貴重な文化財として日本庭園の真髄を伝えている。

浜離宮恩賜庭園（はまりきゅうおんしていえん）

都内唯一の海水を引き入れた潮入池

潮入の池の中央には「中島の御茶屋」があり、この休憩所で将軍や奥方、公家たちが集い、眺望を楽しんだ。背景は汐留のオフィス街。束の間のタイムスリップを味わえる。

東京湾の干満とともに表情を変える庭園

汐留からほど近い浜離宮恩賜庭園もまた江戸時代を代表する回遊式庭園だ。首都高の高架をくぐり、大手門から園内に入ると柔らかな海風が吹き渡っていた。

この地は、寛永年間(1624-1644)まで徳川将軍家の鷹狩場だった。1654(承応３)年、甲府宰相松平綱重が、兄である第四代将軍徳川家綱から当地を与えられ、葦原を埋め立てて、甲府浜屋敷を建てたことがこの一帯の開発の起源とされる。『甲府日記』の1669(寛文９)年11月の項に御築山泉水を奉行した者に対し褒美が下された記述があることから、庭園としての浜離宮の原型はこの頃に形成されたといっていい。

大手門を入ったところで、その樹齢を冠した「三百年の松」が出迎えてくれる。6代将軍家宣の時代の大改修を機に植えられた。低く張り出した威容が圧倒的だ。

その後、綱重の子、綱豊が第六代将軍徳川家宣となったのを機に、浜屋敷は将軍家別邸「浜御殿」と称され、社交場の機能を果たすようになる。それまでにも庭園には中島茶屋、観音堂、庚申堂、大手門などの施設が造営されていたが、これに加え園内に御田（みた）を整備、常緑の松、泉水が施したと綴られている。第十一代将軍徳川家斉の時代には新たに鴨場や各種茶屋を増設、ほぼ現在の庭園構成となった。明治維新後に皇室の離宮となり名称も「浜離宮」と変更、賓客をもてなす苑地として供用された。

この庭園の特徴に海水を導流する池泉「潮入の池」がある。東京湾の干満によって池の水位が変わり、庭園の様相も刻々と変化する。清澄庭園、旧安田庭園など海辺の庭園で用いられた様式だが、都内で現存するのはここ浜離宮だけだ。池にはボラやハゼなどの海水魚が生息、冬場にはユリカモメやカモが飛来する。東京湾に面した庭園の南側に水門が設けられ、今でもこの堰で海水の出入りを調整している。

東京湾に接続する「水門」で海水の出入りを調整している。潮の干満にともない汐入の池の風景が刻々と変改していく。

関東大震災で焼失した「大手門橋」はその翌年（大正13年）に修復された。江戸期の様式との違いを見ることができる。

本来の姿を現代に、そして未来に伝える

浜離宮は1923（大正12）年の関東大震災で、大手門の渡り櫓（やぐら）やこれに連なる大手門橋、海手茶屋が焼け落ち、護岸も崩壊した。第二次世界大戦末期の東京大空襲でも歴史的建造物は全て焼失した。いずれも修復は早期に完了し、離宮は現代に受け継がれている。しかし、それ以前にも築園から約350年を経て、庭園の機能や時代の変遷に伴い、そのデザインを大きく変えてきたであろうことは容易に想像がつく。

浜離宮は1945（昭和20）年に東京都に下賜され、その後、国の特別名勝及び特別史跡に二重

「内堀」は京都や大阪、長崎から船運された物資を江戸城に搬入する中継施設。護岸には間知石の石積み、荷揚げ用の雁木（階段）が残されている。

周辺の高層ビルからは、浜離宮恩賜庭園の全景を望むことができる。

指定された名園だ。極力本来の姿を保存、復元し、同時に憩いの場としての整備が求められる。都は2004(平成16)年に文化財庭園の保存管理計画を策定し、老朽化した施設の修復や、戦災で失われた建造物の復元に着手した。また、2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けて、明治時代に存在した迎賓館である「延遼館(えんりょうかん)」を復元させ、外国からの要人などをもてなす宿泊施設として活用する方針を示している。土木、建築の見地から、多数の史料を検証し、当時の材料、工法を用いて江戸文化の保存、継承に力を尽くしている。

空間に対峙し、庭園の歴史に思いを馳せる

駒込の六義園、汐留の浜離宮。どちらも東京の一角に残された、都会のオアシスだ。視界を上に向けると、庭園の背景にはマンションや超高層ビルが林立し、ここが東京の真ん中、あるいは日々開発が進むウォーターフロントであることを再認識する。しかし、一歩足を踏み入れその静寂のなかに身を置くと、江戸期の庭園に込められた思想が伝わってくる。現代における日本庭園は、日常の喧騒から隔絶した癒しの場であると同時に、新たな発見に出会えるスポットでもある。歴史に育まれたこの庭園の植栽、施設の遺構などに目を凝らし、神経を研ぎ澄ましながらその静謐な空間を堪能したい。

横堀(潮入の池)に架かる「海手お伝え橋」を通ると、ボラなどの海水魚を見ることができる。